
最後は薄紫のゼリーで

百合茶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最後は薄紫のゼリーで

【Nコード】

N 8 6 7 1 A

【作者名】

百合茶

【あらすじ】

ランチバイキングで、隣のテーブルにどんな人がいたのか想像するのは簡単なのに、あなたの事は分かりそうに分からない。

夏休み期間中のランチバイキングは主婦たちや子供連れで賑わっているが、私の右隣のテーブルは席を立っただけなの、食器だけがのっていた。

私は大さじ2杯分の『ロブスターグラタン』をつつきながら、5分程前のテーブルを想像する。

ランチの皿は途中で下げられらしく、あるのはグラスが4つ…席の数と同じ。いずれもストローはなくて、コーヒーカップも2つある。テーブルの真ん中に皿が1枚、その真ん中に団子が1つ。ゼリーのカップやケーキ用フォークもある。

主婦4人組つてところだろうか。

ケーキも菓子も食べたいという欲張り、それでも熱いお茶はとらず、アイステイーとホットコーヒーをがぶがぶ飲む。息子とか旦那とか、共通の話を持ち込みながら『このケーキ、さんが好きそうな味よ。』なんて、感想にならない感想を述べる。しかし、さっきまで動いていた手も、団子が1コになるとぴたりと止まり、口はお喋りのために働く。親しく喋りながらも変な遠慮。笑い話にちらつかす見栄。『うちの子、ずっと私立の学校だったものだから…』ってね。

結局団子には誰も手を付けず、会話にピリオドを打つ者もない。適当にグラスの氷をカラカラ言わせ、それが溶けた所でようやく『洋服見に行きましょう』となって、席を立つ…。

私は勝手に彼女達の行き先まで推理して、『ペロンチーノ』と『一口ピッツァ』を食べる。つまり、彼女達はピザを『ピッツァ』と言う風に気取りつつ、『一口』と庶民っぽさもアピールして、『ペロンチーノ』とか言う他人を妬む。

私はそんな気を遣う生き物にはなりたくない。それでも、あなたと『ペペロンチーノ』を食べてみたいと思う。最初はこの式場のディナーでもいいけど、やっぱり白木のテーブルに、5月の風を感じながら向かい合って食べたい。

あなたはどう思っているか知らないけど、私は『主婦』にはなりたくない。

バカね。と言う風に、『海の幸マリネ』はハズレくじだった。私があなたを理想の相手だと思っただけじゃ、あなたの心を動かす事はできないのに。つい、あの『主婦』の生活に私とあなたを当てはめてしまう。どうか、この『海の幸マリネ』があなたの作った料理ではありませんように…。

不思議ね。

私は小さい頃から推理小説が好きだった。…だから『警察官』になった訳ではないけれど。その想像力も豊かだと言われて育った。隣の空き席の様子でどんな人が座っていたのかくらい、容易に察しがつく。

それなのに、あなたの事は答えの分からない迷宮入り事件。その手で作った料理…例えば『ビーフストロガノフ』…をとっても、『お気に召しましたか?』とすっかり顔を覚えられても、あなたの内側が分からなかった。掴めなかった。そして、今でもよく分からない。想像や理想ならいくらでも言える。だけどそれは本物のあなたではないし、あなたを理解したとは勿論言えない。

あんなに嫌悪感を抱いている『主婦』があなたを指す代名詞に発音が似ている。

ふとそんな事を思っ、ため息をつく。私は『主婦』に『嫉妬』しているのだろうか。別に私は家にいたいとは思わない。ただあなたと生活をともにしたいだけ…

皿に盛った全ての料理を平らげ、デザートに何を食べようか迷った。

ガラス戸をスライドさせると、よく冷えた面々が…1度は食べた事のあるケーキやフルーツたちが…並んでいた。

『ブドウゼリー』。新入りかしら…。

私は薄紫の『ブドウゼリー』をスプーンで浅く掬う。

まるであなたはゼリーよね。おおらかで開けっぴろで、ゼリーのように一緒にいると心地よくて。それなのに私はあなたの事を知る事ができない。濃度の低いこのゼリーは、スプーンの色を殆んど替えずに透き通している。私もこんな風にあなたを知っていたつもり。けれども、薄紫のゼリーはカップの中では色が重なって綺麗にブドウ色に染まってしまふ。もしかしたら、あなたもこんな風に染まっているのかもしれない。

最後の一さじを口に運んで、席を立つ。

『ブドウゼリー』の味が薄い。

とだけアンケート用紙に書いて、今日は会えるかな？ の期待もほぼ絶望的な店内を後にした。

もう少し、あなたと濃い時間をすごしたら、推理も確信に変わるかしら。と思いながら…。

（後書き）

ジャンル：びみょーですが（焦）
シェフに恋してるんでしょね。多分『洋食担当』の。『主婦』の
くだりが長くて何がメインなのかちよつと迷宮入りデス（意味不）
最後までありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8671a/>

最後は薄紫のゼリーで

2010年11月17日16時03分発行